

平成 30 年度 厚生労働科学研究費補助金(認知症政策研究事業)
認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究
分担研究報告書

認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究

研究分担者 大野 能之 東京大学医学部附属病院薬剤部薬剤主任

研究要旨

認知症患者においては、処方状況を含めて薬物療法の実態はよくわかっていない。そこで、東京大学老年病科に入院した認知症患者の処方実態について後ろ向き調査を行った。入院時薬剤数(種類)は平均 5.5 剤、退院時薬剤数(種類)は 4.6 剤であり、退院時には有意に減少していた。潜在的に不適切な薬物(PIM)の種類は入院時 1.4 種類、退院時 1.1 種類であり、退院時には有意に減少していた。認知症患者においては入院を契機に薬剤の見直しをすることが有用であると考えられた。

A. 研究目的

認知症患者は併存疾患や症状緩和のためにポリファーマシーとなりがちで、薬物有害事象のリスクが高いと考えられる。逆に、アドヒアランス不良や病識欠如、ネグレクト等に関連して過少医療となる可能性もあるが、処方状況を含めて薬物療法の実態はよくわかっていない。そのような認知症者における薬物療法の実態と取り組みの成果を調査解析し、認知症者と家族の視点も踏まえて「認知症高齢者にやさしい薬物療法とは何か？」を解くことを目的とする。

B. 研究方法

東京大学医学部附属病院老年病科の入院患者の認知症者のデータベースを作成し、後ろ向き調査を行った。
(倫理面への配慮)

本研究は東京大学医学部研究倫理審査委員会の承認を受けた後に実施した。

C. 研究結果

2017 年 4 月から 2018 年 3 月に入院された認知症患者 83 名の入院時薬剤数(種類)は平均 5.5 剤、退院時薬剤数(種類)は 4.6 剤であり、退院時には有意に減少していた($p=0.002$)。潜在的に不適切な薬物 (potentially inappropriate medication; PIM)の種類は入院時 1.4 種類、退院時 1.1 種類であり、退院時には有意に減少していた($p=0.014$)。主な PIMの種類は、ベンジアゼピン系・非ベンジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬、抗血栓薬、利尿薬、緩下薬、糖尿病薬などであった。また、Anticholinergic Risk Scale で 1 点以上の患者は入院時 9 名、退院時 4 名であった。入院中に開始された薬剤で多かった種類は、緩下薬、

ビタミン D 製剤、プロトンポンプインヒビター、抗認知症薬、糖尿病薬などであった。一方で中止となった薬剤で多かった種類は、降圧薬、漢方、抗血栓薬、ビタミン剤、緩下剤、糖尿病剤、抗認知症薬、ベンジアゼピン系・非ベンジアゼピン系睡眠薬・抗不安薬、プロトンポンプインヒビターなどであった。

D. 考察

認知症患者においては入院を契機に薬剤の見直しをすることが有用であると考えられた。今後、更に患者の背景や薬剤の開始・中止理由、薬剤師の関わりによる薬物療法の変化などの解析を行い、認知症高齢者にやさしい薬

物療法について引き続き検討を行う。

E. 結論

認知症患者においてはポリファーマシーとなっていることが多く、入院を契機に薬剤の見直しをすることが重要である。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

なし